

友だち

〔高学年〕

明子さんとよし子さんとわたしは、仲よし三人組であった。

ある日、そうじの時間が始まったときである。教室の後ろで、明子さんがわたしにひそひそとないしょ話を始めた。

「ちよつとちよつと。ときどき、よし子さんがあなたの悪口を言ってるよ。」

「えっ。本当？」

「本当やって。ほかのみんなに聞いてごらんよ。わたし、聞きながらはらが立ってきたわ。」

そのとき、よし子さんが笑いながら走ってきた。わたしたちは、急にすつとはなれて、そうじを始めた。よし子さんが、

「何を話してたの。」

とたずねても、

「そうじのこと。早くそうじをしないと終わらないよ。」

と言って、わたしはごまかしてしまった。

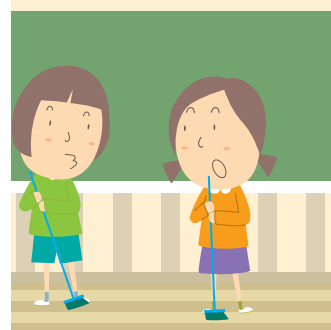
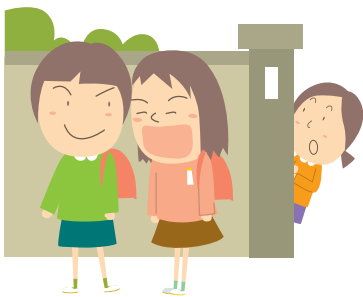
でも、わたしの顔はくもったままだった。

その日の帰り、いやな気分で校門を出ようとすると、前を明子さんとよし子さんが楽しそうに話しながら歩いて帰っていた。

「待って！」

と言おうとした言葉を飲みこんでしまった。

そして、わたしは、なぜか逃げるようにかけ出していた。



何日かそんな日が続いた。明子さんやよし子さんがわたしの方を見ると、目が何だかにらんでいるように見える。また、二人が笑っていると、わたしのことを笑っているんじゃないかと心配になる。二人が何をしても気になって気になって仕方なくなってしまうた。

ある日、頭がいたくなつて学校を休んでしまった。その日の放課後、近くに住んでいる道子さんが学校のプリントを届けてくれた。道子さんは、いろいろ学校のことを話してくれた。そして、「最近、元気がないんとちがう。」と聞かれた。

わたしは、思わずなみだが出そうになった。そして、これまでのことを道子さんに話し始めた。全部話し終えると何かほっとしたような気持ちになった。すると、道子さんは言った。

「明日、このことを明子さんやよし子さんに話そう。やっぱり言わなければ……。」
「でも……。」

「わたしもいっしょにいるから。絶対ぜったいに言った方がいいよ。」
わたしは、道子さんの強い口調にびっくりした。

次の日、わたしは、道子さんにも助けられながら、自分の思っていることを全部話してみた。明子さんやよし子さんは口をとがらせるときもあつたが、最後まで聞いてくれた。そして、

「もう一度、三人で仲よくなれる方法を考えてみよう。」
と二人は言ってくれた。



今は、もとの仲よし三人組ではない。前よりもずっと仲よしの四人組になっている。

